## 3-3　科学では測れない“氣”をどう扱うか──風水の本質と限界

まじめに学び、現場で氣を読み、苦悩しながらも本質を見極めようとしている風水師たちまでが、

「占いの人でしょ」

「スピリチュアルっぽいですよね」

と、軽視や誤解の対象になってしまうのです。

そうして、風水は“信じるか信じないか”の世界に追いやられてしまいました。本来は思想であり、環境学であり、空間設計学でもあるにもかかわらず、です。

しかし、どれだけ誠実に処方しても、どれだけ理論を正しく使っても、それでも効かないことがあります。この問いに、風水師は皆、いずれ向き合うことになります。

「なぜ効かないのか？」──その理由は、風水の理論が間違っているからではありません。そして、風水師の腕が未熟だからという理由だけでもありません。

むしろもっと根本的な理由があるのです。それは、氣の“強さ”という概念です。

風水は、氣の流れや性質を整える技術です。

しかし、氣には性質だけでなく“エネルギー量”や“勢い”があるのです。

たとえば、静かに流れる清らかな氣もあれば、戦争や事故、怒り、破壊といった爆発的な氣もあります。

五行には相剋関係があります。

木は土を突き破り、

土は水を堰き止め、

水は火を消し、

火は金を溶かし、

金は木を断ちます──

理論上はそうなっています。

しかし、それはすべて“氣の強さが等しければ”の話です。

たとえば：

水は火を消します──しかし、一滴の水では、炎を止められません。むしろ蒸発して消えてしまうだけです。

火は金を溶かします──しかし、ロウソクの火では鉄は溶けません。溶鉱炉の火でなければ無理なのです。

土は水を堰き止めます──しかし、大河の奔流に小さな土砂を投げても、何ひとつ変えることはできません。

木は土を突き破ります──しかし、鉢植えの細根では、岩盤を崩すことはできません。

金は木を断ちます──しかし、刃の欠けた刃物では、太い大木を倒すことはできません。

五行理論は、構造を示しています。

しかしその効力は、氣の“勢い”によって現実に反映されるかどうかが変わってくるのです。

これは現場で幾度も体感されている事実です。

どれだけ丁寧に整えた空間でも、強烈な負の氣──たとえば犯罪者の殺意、暴力の痕跡、長年の恨みが染み込んだ場──に襲われれば、風水の処方は“効かない”ように見えるのです。

氣の良い家を建てたはずでした。陽の氣を採り入れ、玄関・寝室・水回りの配置も整えていました。しかし、ある日その家で殺人事件が起きてしまいました。

住人のひとりが、長年蓄積した怒りと憎しみを爆発させてしまったのです。そこに渦巻いていたのは、瞬発的で、破壊的な“氣”でした。そうしたエネルギーに対して、風水の処方ができることは限られています。

風水の力とは、氣の流れを“整える”ことにあります。しかし“暴発する氣”を止める力はないのです。

では、風水に意味はないのでしょうか。

暴発する氣には勝てず、エネルギーの強弱に翻弄され、まじめな風水師は葛藤し、一方では風水を軽く扱う情報が溢れている──このような状況で、風水を信じて生きることは、もう“時代遅れ”なのでしょうか。そんな声も、確かに耳にするようになりました。

あえて言いたいことは、風水は魔法ではないということです。

万能の力でもなければ、すべての人を一様に救う保証でもありません。何かを置くだけで金運が上がる、病が治る──そんな話ばかりが先行してしまっていますが、本来の風水とは、空間に宿る“氣の秩序”を丁寧に整えるための技術であり、思想なのです。

すべてを叶える力ではありません。ですが、整える力はあります。

これは医学にも似ています。どれだけ医療が進歩しても、すべての病気を治せるわけではありません。どれだけ最新の機器や薬があっても、命を救えないことはあります。

それでも、医師たちは可能性のある限り手を尽くし、薬を選び、処置を行います。

風水師もまた同じです。

氣が届くかもしれない。氣が通るかもしれない。

空間が変われば、人の思考や感情が、整うこともあります。

たとえそれが確実でなくとも、そこに“整う可能性”がある限り、風水師は処方を試みるのです。それは迷信ではありません。人の暮らしに対する“祈り”の技術であり、見えない氣と向き合いながら、空間を通じて人生に調和をもたらそうとする、地道で誠実な“整え”の実践なのです。